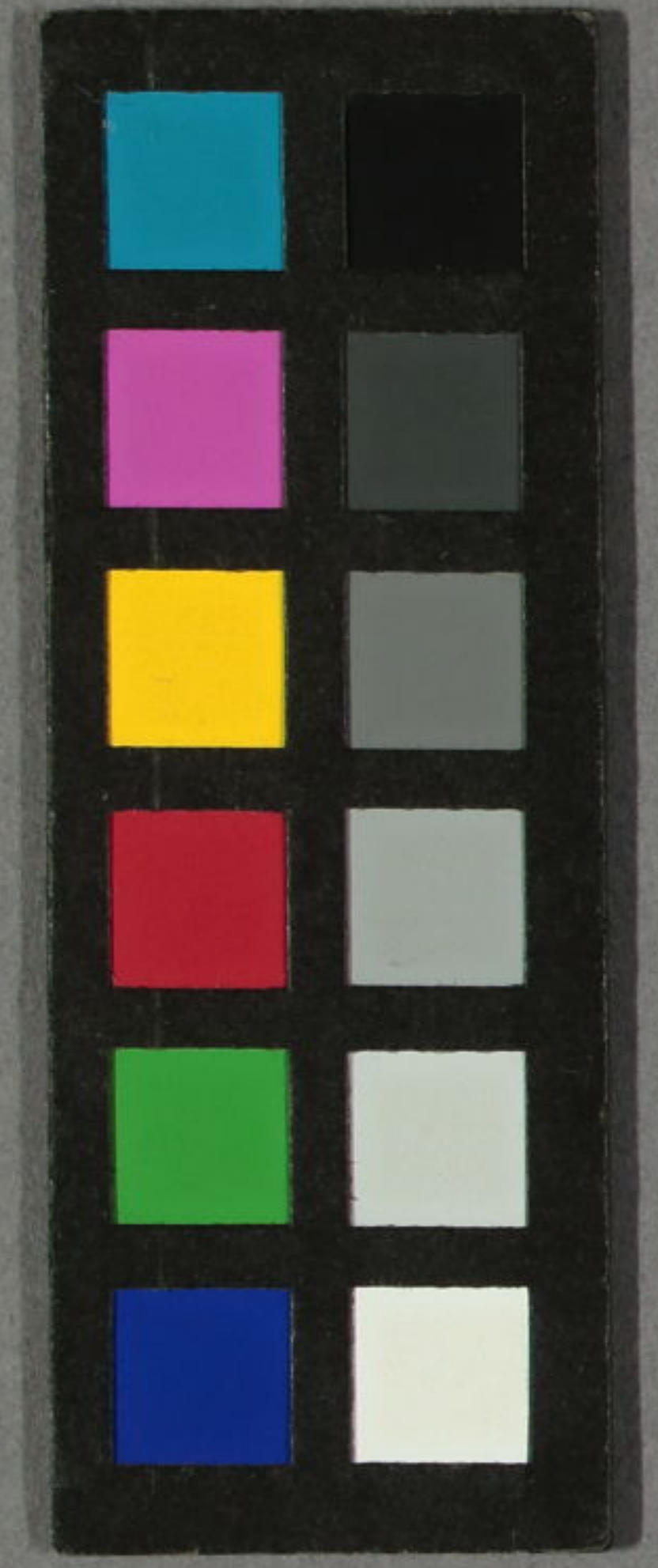


玉川日記

大尾 七編 下

^ 13
3188
13



武松を問ふ

へ 13
3188
13

昭和三十二年
六月二十五日
松

松下

松月
露談

拾遺の玉川卷之三

江戸

狂訓亭主人作

第五套

露の下るまじとく時よとらうてのれ夏も捨ぞ死意は
あはれ詠れ古哥小やあつらんさそも小曾の酒店
よさやく遠入三四人一アア余まのきまうくえて歩
行こら足よりの眼ぐらとぞびれと一遠くねくタイマニッ

尾川合巻三

なつり掛くらんねく着のへんごさ湯豆腐をねがひ
 く茶碗で呑まぐうハヤ多の人ナゼ其後其奥と
 しく居るサア一盃かきねやアアおめくさうじね
 けア誠よ否胸でさうねくべからア此物造さぬ
 こととしやアアアもめくさうじねでもあつぐの六段の
 宅と伯母の所がアアアアアアアアアア取
 越苦勞とさる性さう人のものでもさうい性さきと
 車よ積がくくあア夫さう此め幸次がお梅さん

と連れて逃ごさたもえんあよ苦勞してたのさう
 處ありあ世番屋のお多よさうてえねく一盃お
 め友達の逃ご先とあうねく奴がたるのの持して
 もめく男の名へお捨ふして女の各へさん付よあや
 がるさきのあさうからさうアアをねても組多のうちふ
 友達のるばさん付よさう人いりせ成の正守入
 とお捨よさうあやアねく友達の各とさる付よさう
 の六第一ぶつげごとお捨よさう遺さうアアアアアいが

るせ入といひるまゝ真ッ合さる浅吉が逃ともり
 此バ詮方多く浅マ浅吉え浅マ浅吉え其入の姓
 小秀ええね一面目の野で一どりこけり
 知るあいが今附か此程の野よらも入といひて浅吉
 秀え希今の包ひるははねむと死ぬる覚悟の家
 此より角左るが誂ののまてくく世を浅
 此希笑うちにか必ひ安を日頃の易術よ告ら
 一り一陰陽二氣とまらふ時ハ右と助けく左りの

為よなるといひるまゝ一赴小うねののうとの二人
 元来お鳩が附よりく世話小も多り浅吉が
 身の上をこバ捨がく時刻もとうど子の時よお
 糸ハ志れねど今死ぬる人と佐る功德を以て亦
 彼人もはるがくまくりせると心よ念ト一ヤ
 お申の命の際モく私か安付ちやうとえなるもの
 殺ハせぬ憚り多し私か請合度言らういご五十
 や百の金のこころが身よかしくもと信実よいふ

深江^{フカエ}舟^{ふね}二人^{ふたり}の地獄^{ぢごく}で佛^{ぶつ}より多^{おほく}成^{なり}持母^{もちぼ}一人^{ひとり}あら
 して礼^{らい}の言葉^{ことば}もおぼ^{おぼ}ざりぬ^ぬ 一^{いち}吉^{きち}ろく^{ろく}やく^{やく} 吉^{きち}平^{へい} 一^{いち}
 ちよ^{ちよ}のとちよへ^へ本^{もと}て^てらん^{らん}ると^と呼^よぶ^ぶせ^せ二人^{ふたり}の^のとを^をお
 話^{かた}する^{する} 吉^{きち}お^お浅^あえ^え多^{おほく}え^えど^どあ^あら^らけ^けね^ね人^{ひと}志^し臣^{ぢん}ア
 ち^ちあ^あで^でい^いる^るぐ^ぐ置^いらん^{らん}た^たの^のよ^よ恙^{しやう}且^{かつ}形^{かたち}と^と爰^{こゝ}で^で落^{おち}合^あ
 と^との^の神^{かみ}業^{わざ}で^で一^{いち}誠^{まこと}よ^よま^まく^くう^う色^{いろ}し^しぬ^ぬぐ^ぐそ^そね^ねよ^よ引^ひく^く
 お糸^{いと}さん^{さん}のお^お行^{ゆき}方^{かた}が^がま^まな^なく^くは^は方^{かた}便^{べん}で^で今^{いま}小^こ志^しと
 ま^まま^まと^と一^{いち}せ^せう^うぞ^ぞと^とま^まく^くお^おま^まく^くは^は社^{やしろ}ね^ね人^{ひと}秀^{ひで}さん^{さん}お^おま^まま^ま

生^{なま}れた^たの^のた^たう^う色^{いろ}あ^あく^くあ^あい^いう^う一^{いち}吉^{きち}さん^{さん}小^こも^もう^うく^く礼^{らい}と^とお^おま^ま
 る^るね^ね人^{ひと}あ^あら^らう^うふ^ふと^とい^いふ^ふお^おま^まく^く秀^{ひで}も^もむ^むね^ね 秀^{ひで}一^{いち}お^おい^いら^らア^ア何^{なに}
 ぶ^ぶう^う爰^{こゝ}の^のか^かう^うで^でま^まま^まど^どう^うも^も気^きが^がこ^ころ^ろく^くま^まら^らう^うう^う口^{くち}も
 團^{だん}移^{うつ}る^るも^もち^ちの^のこ^こも^もま^まう^う ち^ちた^たな^なよ^よ 一^{いち}ま^まま^まの^の所^{ところ}と^とは^は苦^く勞^{らう}
 う^うね^ねそ^それ^れよ^よ多^{おほく}旋^{せん}主^{しゆ}方^{かた}お^お礼^{らい}と^とい^いふ^ふか^かう^うど^ど 一^{いち}これ^{これ}サ^サ吉^{きち}
 こ^こう^うは^はま^まま^まう^うね^ね人^{ひと}河^かで^で洒^{しや}落^{らく}る^るぜ^ぜそ^そう^うて^て氣^き障^{ざう}を^をい^い
 り^りん^んぢ^ぢや^やア^アね^ね人^{ひと}秀^{ひで}海^{うみ}く^く 一^{いち}ま^まま^ま秀^{ひで}さん^{さん}の^のい^いひ^ひか^かう^うが
 こ^ころ^ろへ^へハ^ハ子^こト^トい^いふ^ふも^も熟^{じやく}も^も恙^{しやう}い^い月^{げつ}士^しと^との^の志^しま^まま^まう^うね^ねが^が人^{ひと}の

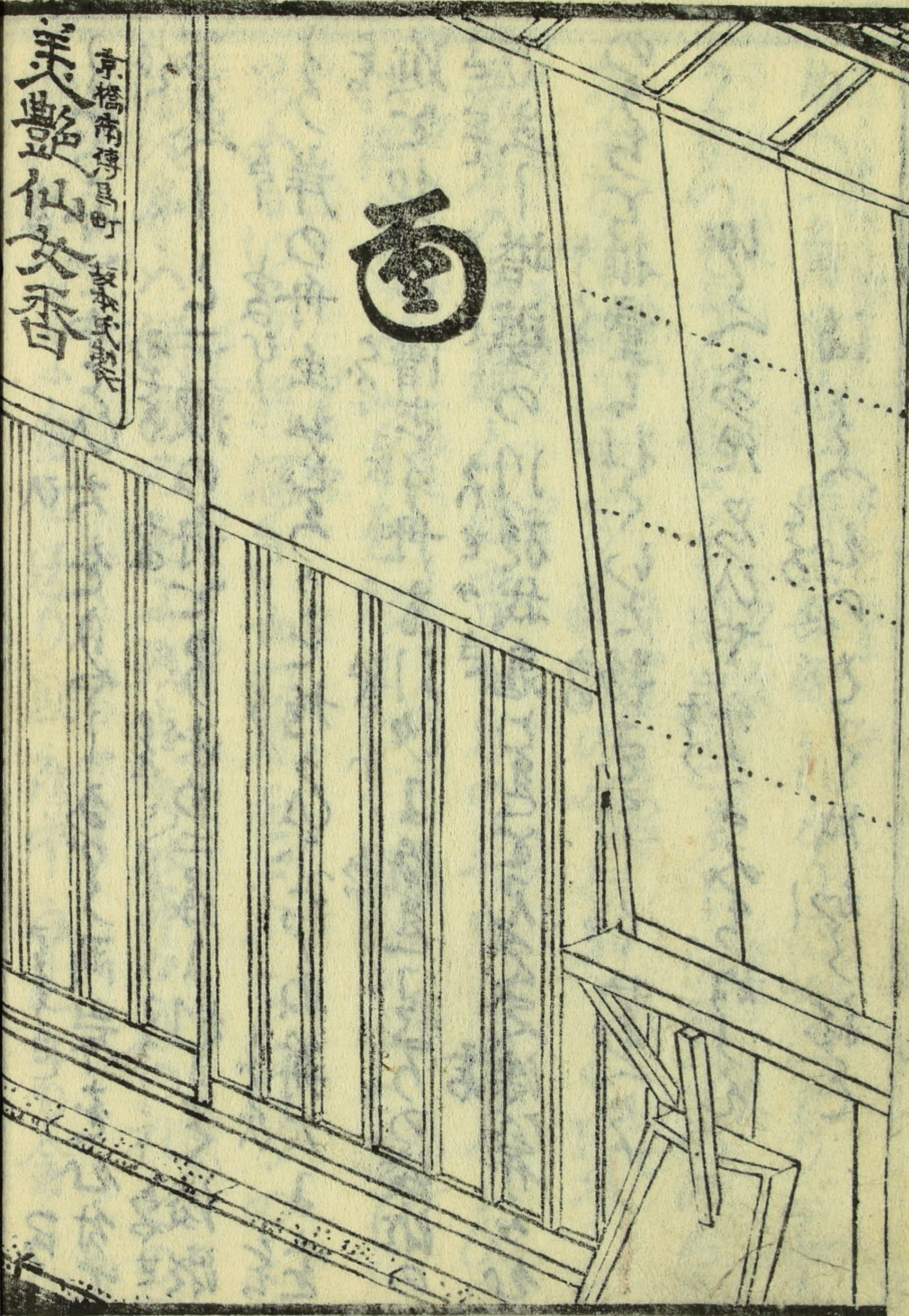
阿糸とくご
 漆次郎
 浅吉が
 必死と
 まんま



平川合戦
 一三

三ノ口合戦

雨



京橋南邊馬町 美艶仙女香

第六套

さても金井橋のお六まゐりのお糸いとが方かたよりさだたら
 家いえとさるさるより 深ふかは糸いとが跡あとおひうけて尋たずねしうども
 さうに行方ゆくえの志こころさざねねいと本ほん考かんがひげよより家いえ
 物ものあんととり大照びでして雨あまととめ其その座ざ
 を行いせせ独言ひとりごとさくさく今いま見みるることことびびねねしして
 ちちとと像ようささええがが居いるるととおお糸いとささええのの姿すがたががああららととおおと
 ドドくくおお夜よ食くのの跡あとししてて此こゝああととすす 膝ひざででええかかうう何なに

野のよの屋やててどどよよくくよよくくとと多たくく伯はく父ふええのの野の一一
 妻まととととああららくく使しのの人にもも使しええととたたららくくととよよ野の虫むし
 ぐぐららううとと以も前のののみみををととりりいいととりりととりり大だい松しょう
 ととくく讀よかからら

ののよよくく使しもも分ぶんららくくととららくく
 ううととくくととららくくととららくくととららくく



ととくくととららくくととららくくととららくく
 ははととくくととららくくととららくくととららくく
 たたととくくととららくくととららくくととららくく
 今いま自よりすすたたととくくととららくくととららくく
 ちちととくくととららくくととららくくととららくく

三川抄選三

十

トよきおひて居るその所へ障子とせうりと押ぬ
て「お六えんといふのらまじどきもつるよ居る来
アし人の鳩吉あつと「お六えん」ハアぢりりして
と奥子りむた「マお清えん」うすい「野へお出たね
アアく上で暮くこの縁をいらあふよんておと
あといひるがう亦せうらう多く積んでとてい

いふまじり人いづはる時あふ

ナいよきまじりで「大恩」に於て家へ
對して面目もあはせ身れせが
せえのえ「家内」乃若くも和ふ
やらせむのいふ「やう」もあふ

六五「まじり」つて人「鳩吉」えん「まじり」つて居
まじりもこれをさるゝといふのふ「マサ」まじりつても
お主人「おひり」お言「うら」分ら「ん

うのうなへ 涙とこ糸一 活ききえおまへへの何とお
 めいごらきむどまをふ骨と折て女一人てえ我
 を探まへ一人の賞りのよあつて人でも探さえゆ不
 命まを捨ちかりふあつといふママあつといふ因果ご
 らふお糸えん実よまらして居まへヨと傍よおいと
 が在どくあをさへくをさあびのさつとほほ
 お六が終き、活き入始終えまりむく涙とふれ
 ろあつていふお六はえんまあつていふまらうね入探

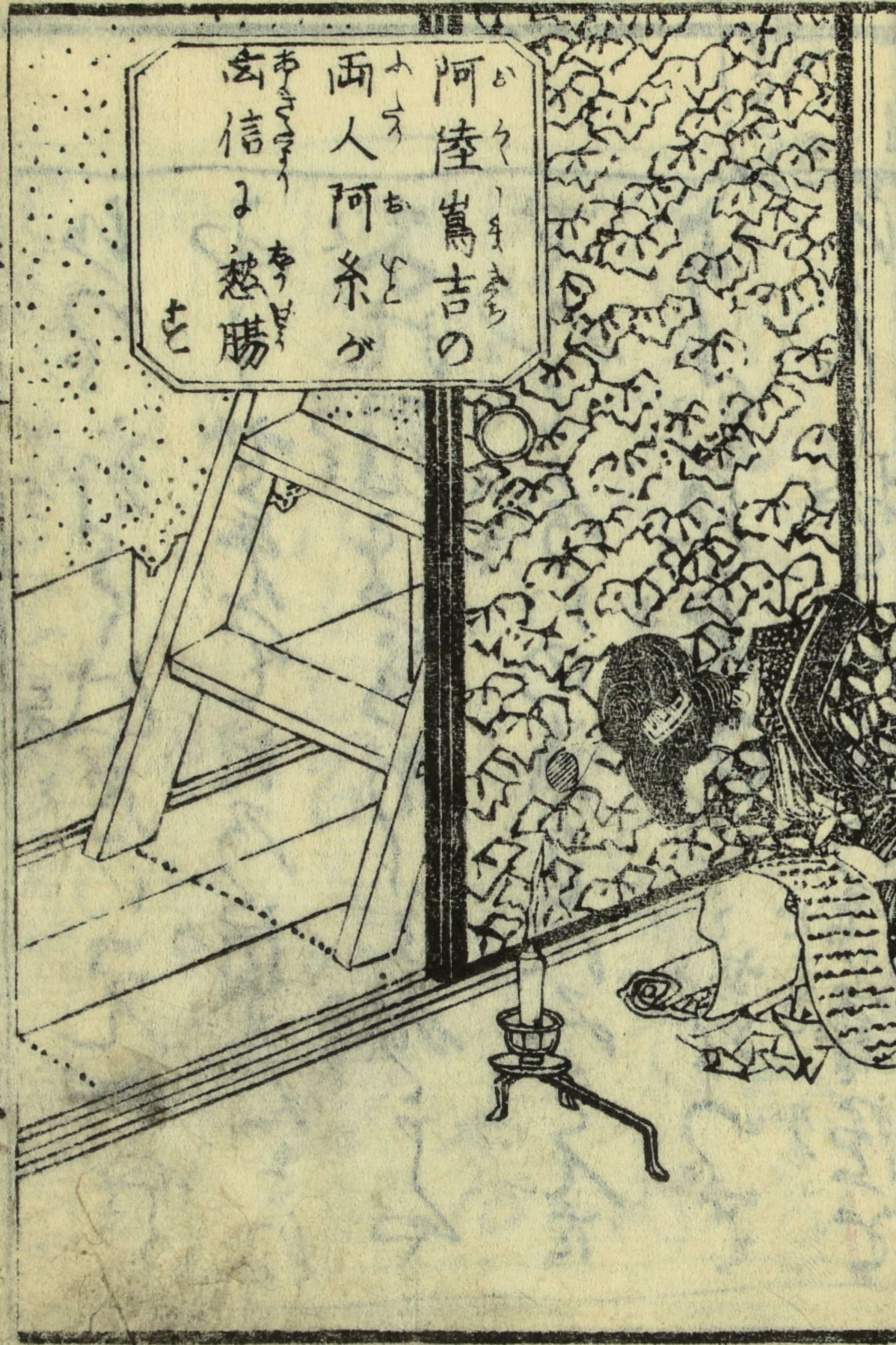
まんかてのまりのさうしふまごらうとあひまの探
 一あつていふの財の死んでもあまするひごりしきつて
 その懐胎のさるはあつていふとわくと涙とあはれ女
 さえあつていふまらうのう
 こま世のあつていふの婦人の情あつて男と格別して
 女たのちとやうふるれとあつていふあつていふとま
 後つていふ人あつていふとあつていふ命あつていふあ
 あつていふとあつていふとあつていふ吾神国人のあつていふ

あつらん

お六むむのあどあくあつらんそのあどあくあつらん
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ

あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ

あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ
あつらんよといふどおあつらんよそのあつらんよ



女をまくあうしておおええあきふらの罪があり
 ますのろみまりしがらづらううサお糸え
 おま人さんとまんまふまこの人私があいううおと
 つつの情あいしてあいるまいよト二人の涙のあ
 ああづづかる野へおお六が伯父正直善を傷としてれ
 一人様ううかつるその姿こらトの紋もとれあ
 へへどど一モウくああままの間よちねんからうを
 まましこああびく甲別道の谷川へ今身を殺と

かかがあると笑く欠附笑くままバ三十才の狂女と呼
 ととれれ廿六才うふその人死ぐゆ志志ぬぬ坂もとし
 おおれも力と落してううかうく帰つとまるの末らう嗟
 是非もわれ世の中とまりてははいる女日士らの是
 弥まん此竹の模振目や死常人の残編を讀ぶ
 七後不高評あるべし

拾遺の玉川卷之三 尾

江戸書林
 大書士 下平三郎
 小書士 三平目
 西林 兼久
 全梓
 江戸書林
 大書士 下平三郎
 小書士 三平目
 西林 兼久
 全梓
 江戸書林
 大書士 下平三郎
 小書士 三平目
 西林 兼久
 全梓
 江戸書林
 大書士 下平三郎
 小書士 三平目
 西林 兼久
 全梓

江戸 作者 狂訓亭主人作

江戸 画工 歌川國直 模寫

江戸 戲友 清元延津賀枝合

江戸 筆者 松亭主人書

馬喰町三丁目角

西村屋與八

江戸書林

小傳馬町三丁目

全梓

文溪堂 丁子屋平兵衛



舟中
日記
一冊